



Title	尾高型アクセントの二拍形式名詞が頭高型で発音されるとき：『日本語話し言葉コーパス』を用いた分析
Author(s)	出野, 晃子
Citation	阪大日本語研究. 2007, 19, p. 67-96
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8856
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

尾高型アクセントの二拍形式名詞が頭高型で発音されるとき —『日本語話し言葉コーパス』を用いた分析—

Accentual variants on 2 mora, final-high type, formal nouns :
Analysis of the Corpus of Spontaneous Japanese

出野 晃子
IDENO Akiko

キーワード：尾高型、頭高型、二拍形式名詞、『日本語話し言葉コーパス』、アクセント知覚位置

【要旨】

二拍形式名詞コト・モノ・トキのアクセントは、アクセントに関する情報が記載された辞典類には、いずれも尾高型アクセントとして掲載されている。しかし、実際の発話の中では頭高型アクセントが生起する場合も多い。そこで、その実態を『日本語話し言葉コーパス』を用いて検討した結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 形式名詞コト・モノ・トキは、普通名詞よりも高い確率で、頭高型アクセントが生起している。
- (2) 頭高型アクセントが生じるのは、前接する語が平板型アクセントの場合に現れやすい条件変異である。しかし、トキは特に頭高型アクセントが生起する割合が非常に多く、アクセント変化が生じ、ゆれているという可能性もある。
- (3) トキのみにアクセント変化が起こった要因の一つには、トキの最終モーラ「キ」が無声破裂音の狭母音を含むため、母音の無声化が生じやすい環境だからである。また、トキは、コト・モノと比べると、句末付近よりも句頭付近に出現することが多いという特徴も影響していると考えられる。
- (4) 頭高型アクセントの生起の言語外的要因を検討した結果、個人差が大きいことが明らかになった。頭高型アクセントが生起する確率は、講演することに慣れていない話者の方が多い。また、原稿を見ずに自発的に話す講演の場合に多く、さらに、リラックスして話しているように聞こえる講演の場合にも多い。

1.はじめに

アクセントの型は一語につき一つの型だけを持つものが多いが、複数の型を持つ語もある。アクセントが記載された辞典類¹⁾（以下、アクセント辞典類と表記する）には、東京方言をベースとした日本語のアクセントの型が記載されているが、アクセント辞典には記載されていない新たなアクセント型が生じているという例も多く報告されている（稻垣・堀口1979、稻垣1984、馬瀬・佐藤1985・1989、佐藤1990、相澤1996・2003、秋永1999など）。これらの研究成果は、アクセント辞典類に新たなアクセント型が掲載されるようになるための論拠となる有益な情報であろう。

アクセント調査はこれまで、読み上げ調査を主として行われてきている。読み上げ調査であれば、発話意図や発話環境などがある程度統制でき、分析対象を絞ることができるからである。それに対し、自発発話を用いた調査の場合は、読み上げ調査よりもイントネーションが多様に関わってくる。そのためアクセント型の高低がはっきりと実現されない可能性があり、聴取者にとって聞き取りが困難なことが多い。また、自発発話を用いてターゲットとする語のアクセントを抽出するという作業には多大な労力がかかる。それゆえ、従来のアクセント研究では自発発話を材料にすることが少なかったように思われる。

2004年6月に公開された『日本語話し言葉コーパス²⁾』（以下、CSJ³⁾と表記する）は、自発発話の大規模コーパスであり、大人数の自発発話の音声と、その音声に関わる多くの情報が格納されている。例えば、詳細な形態論情報がすべての音声に付与されているため、簡単にターゲットとなる語や情報を抽出できる。これを用いることにより、アクセントの多様性の実態や、現象が生起する言語内的要因を詳細に調べることができる。さらに、話者の属性情報や発話意識データ、および調査者による印象評定データなどの様々な付加情報が提供されているので、言語外的要因についても観察できる。

そこで、本稿ではCSJを用い、アクセント辞典類では尾高型しか掲載されていない二拍形式名詞、コト・モノ・トキのアクセント実現の実態とその生起要因を観察する。まず、次節で先行研究によるアクセントの「ゆれ」と「変異」について概観し（§2）、次にCSJの概要とアクセント情報（§3）及び分析対象について（§4）述べる。そして、分析対象の音声的特徴や前後の環境など、言語内的要因について考察する（§5）。次に、言語外的要因について、分析対象とする語に頭高型アクセントが生起する割合を、個人別、講演種類別に観察し、要因を検討する。（§6）

2. アクセントのゆれと変異

一つの語に対して複数のアクセントが用いられる現象は、一般的には「アクセントのゆれ」と称される。アクセントのゆれには、ある語について、アクセントの型が地域や世代などの同一集団内において各個人で異なる場合（個人間のゆれ）と、同一個人において複数のアクセント型が出現する場合（個人内のゆれ）とがある。東京方言話者におけるアクセントの個人間および個人内のゆれを指摘した資料として、馬瀬・佐藤（1985）の『東京語アクセント資料』上巻・下巻がある。この資料は、ゆれが生じていると予想される語について行われた調査の記録である。またこの資料を用いた研究（佐藤1990、馬瀬・佐藤1989、相澤1996・2003、など）や、独自の読み上げ調査に基づいた報告（稻垣・堀口1979、稻垣1984、秋永1999、など）もある。

日本語のアクセントは、語ごとに高低の変化パターンが定まっている。一方、イントネーションは語より大きなレベルでの変化を一般に表す。アクセントが要求する高低変化が抑えられて「アクセントの弱化」（郡1997・2003）が生じることで、型の高低が不明瞭になることが多い。ある語が発話されるときには、様々な発話意図や発話環境によりイントネーションが被さる。そのため、その語のアクセントの高低差は様々な程度で生起する。これは、アクセントの型のゆれとは区別すべき現象である。

これまでのアクセント調査では、ターゲットとなる語のアクセントを効率的に観察するために、イントネーションの影響を極力避けることが可能である、統制された発話環境における読み上げ調査という方法が用いられてきた。しかし、読み上げ調査で収集された音声は、日常用いられる音声とは異なり、不自然になる可能性がある。土岐（2005）は、日本語教育の観点から、「従来の音声研究の成果には、どちらかと言えば、ひとつひとつ丁寧に発話した場合の音声現象について記述した情報が圧倒的に多いといってよい。（中略）。丁寧に読むと、それだけ一種の強調を伴って、個々の音を単独で発話した場合に近くから、文中や語中、母音間などで、自発発話として発せられた場合とではどうしても違ってくる。」と述べている。

自発発話の音声であれば、読み上げ調査による不自然さの弊害を避けることができる。自発発話を用いたアクセント研究には、前川・五十嵐（2006）がある。前川・五十嵐（2006）は、CSJを用いて2モーラ助詞の韻律を分析しており、先行語が無核ならば分析対象の助詞はアクセント核を保存するが、先行語が有核の場合、「核喪失」することがあるとしている。先行語が有核でも助詞にアクセント核が生じているという場合は、「助詞が韻律上の独立性を保持している」とし、反対にアクセント核が消去される発話に

おいては、助詞は「韻律上内容語に従属している」としている。そして、助詞の韻律的独立性における言語的要因と社会的要因の関与について述べている。ここでの結果は、アクセントのゆれとは異なり、ある条件の元に生起する、アクセントの条件変異だと言うことができるだろう。

3 . CSJ の概要とアクセント情報

3 . 1 . CSJ の概要

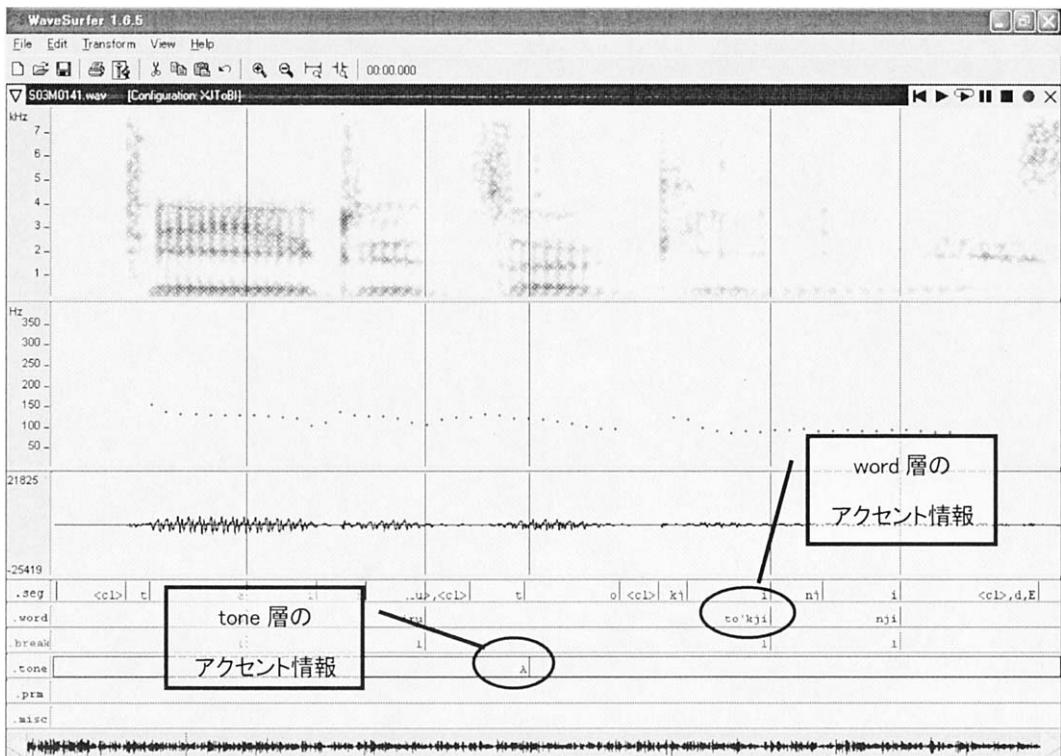
CSJ は、2004年6月に国立国語研究所が情報通信研究機構と協力して開発した、大規模な話し言葉のコーパスである。データはモノローグ中心であり、学会における口頭発表（以下、「学会講演」と）、一般話者による主に個人的な内容に関するスピーチ（以下、「模擬講演」）という2種類のモノローグ音声が全体の90%を占めている。各音声には、研究用付加情報として転記テキスト・形態論情報が付与され、また、各話者の出生地や属性情報も付けられている。

さらに CSJ の中の「コア」と呼ばれるデータには、詳細な音声情報として、分節音と韻律ラベリングが付与されている。データ数は学会講演70、模擬講演107、延べ177講演、異なり人数にして137名分である。コアに格納されている話者のほとんどは東京および首都圏の話者であるため、コアのデータは東京方言話者の発話した音声であるとみなすことができよう。話者の数は、学会講演には男性が多く（女性の2倍）、世代も若年層が多い（1965年生から1979年生までの世代が全体の65%を占める）といった偏りがあるが、模擬講演は性差・世代差のバランスを考慮し、男女比も均等にされている。

CSJ を用いれば、検索機能によりターゲット語の抽出が容易である上、付加情報を用いて言語内的要因、言語外的要因の両面を分析できる。以上のような理由から、本稿では CSJ におけるコアのデータの音声情報及び研究用付加情報を用いる。

3 . 2 . CSJ のアクセント情報

CSJ では、音声特徴のラベリングには X-J-ToBI⁴⁾ というシステムを採用している。【図1】に、音声ソフト WaveSurfer で開いた X-J-ToBI による「(ハタライ) テイルトキニ」という発話の画面を例示する。



【図1】J-ToBIによる「(ハタライ) テイルトキニ」ラベリング例

X-J-ToBIにおけるアクセント情報には二種類ある。一つは「アクセント知覚位置の情報」であり、語にアクセントの下がり目が知覚された場合、下がり目が知覚されたモーラの母音の後にアクセント記号「」が付与されるものであり、【図1】では、word層にアクセント知覚位置が「」で記されている。もう一つは「物理的なアクセントの情報」で、【図1】のtone層に、アクセント核によるF0下降が始まる箇所に記号「A」が付与されている。本稿では、前者の「アクセント知覚位置の情報」を用いる。

CSJに納められているXML文書⁵⁾には、知覚されたアクセントの位置は数字情報が示されている。これは、知覚アクセント位置が語の最初のモーラから数えて何番目にあるかという情報である。本稿でもこれに倣い、知覚されたアクセントの下がり目の位置に数字(①②③⁶⁾)を用いている。

ただし、前接する語は拍数が一定ではないため、アクセントを語の最初のモーラから数える方式ではわかりにくい。そのため、前接するアクセントの表示には、語の最終モーラから数えて何番目にアクセント核があるかを、マイナス表示で(−②のように)表す。(無核の場合は①である。)

これらの数字はあくまで CSJ の作成に関わった判定者が知覚した「アクセント知覚位置」のことであり、アクセント辞典類における「アクセントの型」とは異なるのであるが、アクセントの型とアクセント知覚位置の聴覚印象が一致することは多い。①という音声はアクセントの下がり目が知覚されないものであり、音韻論的には平板型アクセント（以下、平板型と表記する）に相当するものと考えられる。本稿の分析対象である二拍名詞であれば、①は最初のモーラに下がり目が知覚されるもので、頭高型アクセント（以下、頭高型）に相当し、②は最初から数えて 2 番目のモーラにアクセントの下がり目が知覚され、尾高型アクセント（以下、尾高型）に相当する。

4 . 分析対象

4 . 1 . CSJ における二拍名詞の延べ語数

CSJ の転記テキストでは、二種類の表記法を採用している⁷⁾。漢字と仮名を中心とした可読性の高い形式の「基本形」と、実際の発音を仮名で書ける範囲で忠実に書き起こした「発音形」である。「発音形」のうち、丁寧に発音された場合の表記が「代表形」である。本稿では、主に「代表形」を用いる。

CSJ のコアにおける名詞の生起数は延べ97686例であり、そのうち二拍名詞⁸⁾は延べ19523例である。内訳は、学会講演55461例中8501例、模擬講演42225例中11022例である。二拍名詞のうち、生起頻度の高い二拍名詞上位20語とその延べ語数を【表1】に示す。【表1】の「語」の項の左側にカタカナで「代表形」を記し、右に漢字で「基本形」を記している。（ただし、形式名詞⁹⁾として用いられる場合には漢字表記は不適切である。）

【表1】生起頻度の高い二拍名詞上位20語と延べ語数

順位	語		生 起 数	順位	語		生 起 数
1	コト	事	3768	11	タメ	為	306
2	モノ	物	1589	12	イミ	意味	300
3	トキ	時	885	13	カタ	方	252
4	ホー	方	730	14	レー	例	241
5	ヒト	人	673	15	オト	音	214
6	イマ	今	620	16	ウエ	上	185
7	アト	後	604	17	ホカ	他	163
8	ナカ	中	550	18	コロ	頃	156
9	ワケ	訳	519	19	バシヨ	場所	153
10	ツギ	次	320	20	ヒヨー	表	113

【表1】から、上位3語はコト・モノ・トキで占められていることがわかる。コト・モノ・トキは、いずれも形式名詞として用いられることが多い語である。また、この3語で、全二拍名詞用例数の約32%を占める。また、他にも、形式名詞として用いられることが多い、ホー、ワケ、タメなども上位に位置する。

これらのアクセントのうち、アクセント辞典類に掲載されたアクセント型が尾高型と頭高型である語の、CSJにおけるアクセント知覚位置の割合を【表2】に表す。

【表2】二拍名詞のアクセント型とCSJにおけるアクセント知覚位置の割合

アクセント知覚位置 辞典類記載アクセント	語	①		②		③	
尾高型 (形式名詞)	コト	877	23.3%	1087	28.8%	1087	47.7%
	モノ	435	27.4%	351	22.1%	800	50.3%
	トキ	237	26.8%	573	64.7%	75	8.5%
	タメ	147	48.0%	30	9.8%	129	42.2%
尾高型 (普通名詞)	ツギ	18	5.6%	17	5.3%	28.5	89.1%
	オト	66	30.8%	6	2.8%	142	66.4%
	ヒト	333	49.5%	4	0.6%	335	49.8%
	イチ	27	27.0%	17	17.0%	56	56.0%
頭高型 (形式名詞)	ホー	162	22.2%	557	76.3%	13	1.8%
	ワケ	202	38.9%	309	59.5%	8	1.5%
頭高型 (普通名詞)	イマ	103	16.6%	509	82.1%	8	1.3%
	アト	23	3.8%	578	95.7%	3	0.5%
	ナカ	24	4.4%	524	95.3%	2	0.4%
	レー	18	7.5%	222	92.1%	1	0.4%

多くの語において、アクセント辞典類に掲載された型だけではなく、多様なアクセントが生起する。そして、アクセント知覚位置がばらついている語は特に形式名詞に多い。コト・モノ・トキも、形式名詞として用いられることが多い、本来は尾高型である。しかし、CSJのラベリングでは②だけではなく①や①も多い。一方、同じ尾高型である普通名詞のツギ・オト・ヒトは、②が大半で①は少ない。また、アクセント辞典類では頭高型である、イマ・アト・ナカ・レーのアクセント知覚位置も、ほぼ①であり、ばらつきが少ない。そこで本稿では、アクセント実現の多様性が観察されるコト・モノ・トキを分析対象とする。

4.2. 分析対象外

以下のものは分析対象から除外する。

- 1) 後接する品詞が、助詞・助動詞以外の場合
- 2) 後接する助詞・助動詞のうち、尾高型のあとにも高くつくアクセントを持つもの
(助詞「ノ」・「ダケ」、助動詞「ラシイ」)
- 3) コト・モノ・トキが形式名詞としてではなく普通名詞として用いられているもの

まず、1)を対象外とする理由について述べる。CSJのアクセント知覚位置の情報を、後接する品詞別にみたところ、分析対象に②が付与されているのは、後接する品詞が助詞・助動詞の場合にはほぼ限られていた。ほとんどの助詞・助動詞は、前接する名詞のアクセント型を変えず、尾高型に後接する場合は低く下がって付く(秋永編2001)ので、尾高型という型を明示することができ、それ以外の品詞とはふるまいが異なる。そのため、後接する品詞が助詞・助動詞以外のものは除外する。

次に2)を対象外とする理由を述べる。助詞・助動詞が後接する場合は、1)に述べたとおり尾高型が明示されるのだが、助詞「ノ」「ダケ」、助動詞「ラシイ」の場合は、尾高型に後接する場合も、下がり目が来ずに高く発音されるため、CSJのラベリングでは①が付与される可能性が高いからである。

また、3)の条件により、用法が形式名詞でないもの、つまり普通名詞として使われているものは除く。削除した例は、「コトがうまく運ばない」4例、「コトが起こった」1例、「モノを言う」1例、「海のモノとも山のモノとも」2例である。なお、トキには普通名詞に該当する用法はなかった。

4.3. 分析対象の数

以上3つの条件に該当するものを分析対象から除外し、コト3514例(コト全体3768例の93.3%)、モノ1441例(モノ全体1589例の90.7%)、トキ665例(トキ全体885例の75.1%)、合計5621例を本稿での分析対象とする。分析対象コト・モノ・トキのアクセント知覚位置の数と割合を【表3】に表す。

【表3】コト・モノ・トキのアクセント知覚位置の数と割合

語	3 語 合 計					コト				
	①	②	③	計	①	②	③	計		
アクセント知覚位置	①	②	③	計	①	②	③	計		
合 計	1243	1747	2622	8	5620	735	1005	1768	6	3514
割 合	22.1%	31.1%	46.7%	0.1%	100%	20.9%	28.6%	50.3%	0.2%	100%

語	モノ					トキ				
	①	②	③	計	①	②	③	計		
アクセント知覚位置	①	②	③	計	①	②	③	計		
合計	333	321	785	2	1441	175	421	69	665	
割合	23.1%	22.3%	54.5%	0.1%	100%	26.3%	63.3%	10.4%	100%	

3語ともばらつきは大きいが、ばらつき方が異なる。コトとモノは②が過半数である。一方、トキの場合は、②は10.4%しか生じていない。また、①が生じる割合は、コトは28.6%、モノは22.3%ほどであるが、トキのみが他よりも突出して①が63.3%も生じている。なお、①はそれぞれの語で2割程度生じている。

4.4. 前接アクセント別に見た当該アクセントの数

当該の語のアクセント知覚位置（以下、当該アと表記する）は、前接する語のアクセント知覚位置（以下、前接アと表記する）によって異なると予想される。そこで、前接ア別にみた、3語合計の各当該アの割合を【表4】に示す。

【表4】前接ア別にみる各当該アの割合(1)

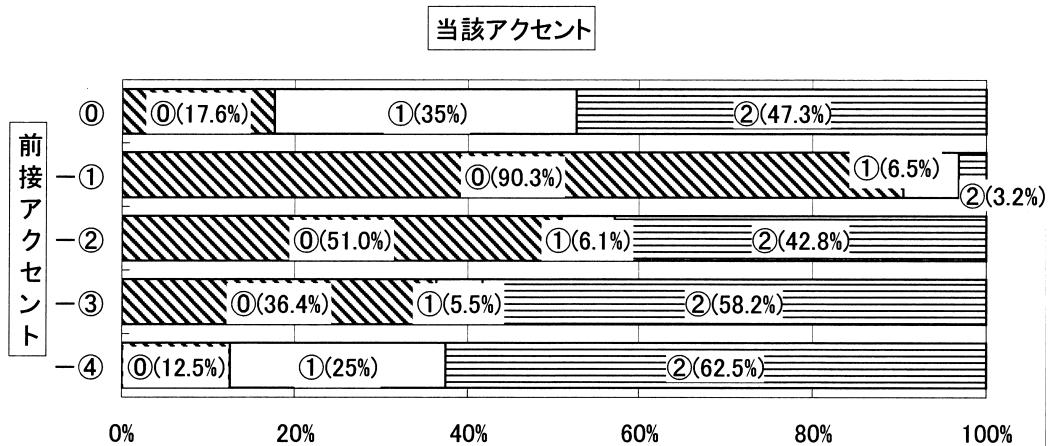
前接ア\当該ア	①	②	③	④	⑤	⑥		
①	853	17.6%	1699	35.0%	2298	47.3%	8	0.2%
②	200	57.8%	17	4.9%	129	37.6%		
②～⑥	190	45.7%	31	7.5%	195	46.9%		
②	106	46.1%	16	7.0%	108	47.0%		
③	60	42.3%	10	7.0%	72	50.7%		
④	21	51.2%	5	12.2%	15	36.6%		
⑤	2	100.0%						
⑥	1	100.0%						

【表4】では、前接アによって当該アの割合が異なることがわかる。前接アが①の場合、当該アで最も多いのは②であるが、①の割合も多い。一方、前接アが①の場合、当該ア①の割合が多い。ここでは、前接アの情報として最初のモーラから数えたアクセントの下がり目の位置を示しているが、次に、前接アの下がり目の位置を末尾から数えるマイナ

ス表示にし、当該アの割合を【表5】【図2】に示す。

【表5】前接ア別にみる各当該アの割合⁽²⁾

前接ア 当該ア	①	②	③	④
①	853	17.6%	1699	35.0%
-①	28	90.3%	2	6.5%
-②	341	51.0%	41	6.1%
-③	20	36.4%	3	5.5%
-④	1	12.5%	2	25.0%



【図2】前接ア別にみる各当該アの割合⁽³⁾

【表5】【図2】において、前接アが-①の場合に当該ア①が90.3%である。ただし、-①の用例数は少ない(31例)。前接アの大半は、最終モーラから数えて後ろから2番目の一②である。前接ア-①が当該アからの核間距離が最も近く-④が最も遠いことになるが、前接ア-④の場合に、当該ア②の割合が多い。つまり、当該アからの距離という言語的な条件も、重要な要素であるということであろう。

4.5. 分析対象音声の聞き直し

4.4. で明らかになったように、前接アが有核の場合は無核の場合よりも当該アが①の割合が多い。しかし、2.で述べたように、自発発話はアクセントの弱化(郡1996)が読み上げ調査よりも頻繁に生じる環境であるために、アクセント型が不明瞭になることがある。特に前接アが有核の場合、アクセントが要求する高低変化が抑えられ、音調の山が

小さくなり、アクセントが知覚しにくいと予想される。CSJ のラベリングだけでは、このようなイントネーションレベルでの現象がどの程度生起しているかが不明であるため、筆者が再度聞き直して音声を確認した。ランダムサンプリングでそれぞれ100例ずつ抽出した。前接アが無核の場合を【表6】、前接アが有核の場合を【表7】に表す。

【表6】前接アが無核の場合の聞き直し結果

聞き直し数/全用例数	100/853	100/1699	100/2298
CSJ 聞き直し	①	①	②
判定不可能	96	16	6
(不明)	(10)		
(①と予想)	(9)		(6)
(②と予想)	(77)	(16)	
①と判定	2	83	3
②と判定	2	1	91

【表7】前接アが有核の場合の聞き直し結果

60/390	48/48	60/324			
①	①	②			
60	100%	8	16.7%	5	8.3%
(36)	60.0%	(2)	4.2%	(2)	3.3%
(8)	13.3%			(3)	5.0%
(16)	26.7%	(6)	12.5%		
		40	83.3%	1	1.7%
				54	90.0%

まず、【表6】の、前接アが①の場合は、平板型なのではなく、イントネーションの影響でアクセント型が不明瞭になっている例がほとんど(96例)であった。アクセントが弱化している例が44例、助詞を強調して発音しているため下がり目が聞き取れない例が60例、当該アの直後にポーズが入ってアクセントの立て直しが行われたため、下がり目が聞き取れないという例が6例あった。(これらの現象は、重複して現れることもあったため、合計は96例を超える。) なお、ラベリングミスなのか、筆者の聞き取りでは①だと確信できる例が2例、②だと確信できる例も2例あった。

次に、当該アが①の場合は、①だと確信できる例が83例であった。しかし、判定不可能な音声も16例ほど存在した。当該アが②の場合は、②だと確信できる例が91例、判定不可能な例も6例あった。

次に、前接アが有核の場合（【表7】）でも、当該アが①の場合はアクセント型の判定が難しいことがわかった。ほとんどの①が、アクセントの弱化や助詞を強調した発話であるため、判定不可能であった（実際には①か②のどちらかに属すると思われる）。一方、当該が①の場合は、①だと確信できる例が83.3%、判定不可能な例が16.7%であり、当該が②の場合は、②だと確信できる例が90%、判定不可能な例が8.3%である。この結果は、前接が無核のもの【表6】と酷似している。

以上、前接アが有核でも無核でも、当該アが①のもののほとんどはアクセント型の判定が困難であった。また、CSJ のラベリングで①とされたものは、平板型なのではなく、

実は①や②のどちらかである可能性が高いということがわかった。判定不可能な例は、当該アが①の場合には16%程度、当該アが②には6%から8%程度存在する。しかし、筆者の聞き直しと一致する確率は高い。そこで本稿では、CSJのラベリングにおける①を頭高型に相当し、②を尾高型に相当するものと考える。

5. 言語内的要因

本節では、形式名詞コト、モノ、トキそれぞれの当該アの現れ方を、前接ア、品詞、無声化環境、語の意味と統語環境といった言語内的要因から考察する。

5.1. 前接するアクセント

4.3.において前接ア別に当該アの割合をみたが、ここでは、コト、モノ、トキそれぞれの場合についての前接ア別の当該アの割合を【表8】に示す。以下、当該ア③は②に含むこととする。

【表8】前接ア別にみたコト・モノ・トキの各当該アの割合

前接ア	当該ア	①	②	③
①	コト	506 94.4%	16.6%	978 32.1%
-①		17	48.8%	0 5.6%
-②		200	33.3%	23 45.6%
-③		12	50.0%	3 58.3%
-④		0		1 50.0%
①	モノ	226 87.5%	18.6%	305 25.1%
-①		7	47.2%	1 12.5%
-②		92	38.9%	14 7.2%
-③		7	16.7%	0 61.1%
-④		1	66.7%	1 6.7%
①	トキ	121 80.0%	20.3%	416 69.8%
-①		4	77.8%	1 20.0%
-②		49	100.0%	4 6.3%
-③		1		0 15.9%

【表8】から、前接アが①の場合、当該アが①になる割合が高く（【表8】では太字ゴシックの数値）、コト32.1%、モノ25.1%、トキでは69.8%もあるということがわかる。特にトキの場合に顕著に多い。

次に、前接アが有核の場合（—①から—④まで）について述べる。前接アの大半は—②であるため、ここでは—②の場合について言及する。前接アが—②の場合、当該アに①が多く生起する理由は、4.5.で述べたとおり、アクセントの弱化が起こりやすい環境だからである。当該アがはっきり聞き取れないほどに高低があいまいになり、①が増えたのであろう。次に、前接アが—②で当該アが②の割合は、コト45.6%、モノ45.6%と、約半数が②である（【表8】では*italic*の数値）。トキはコト、モノより低く、15.9%である。前接アが—②で当該アが①の割合は少なくなり、コト5.6%、モノ7.2%、トキ6.3%である。以上の結果から、当該ア①（頭高型）は前接ア①（平板型）という条件下で現れやすいといえる。

5.2. 前接する品詞

次に、前接する語の品詞別に考察する。CSJの品詞情報は学校文法に基づいた分類を用いている¹⁰⁾。前接する語に多い品詞は順に、動詞（3017例）、助動詞（1559例）、助詞（380例）、連体詞（300例）、形容詞（230例）、感動詞（74例）、言いよどみ（34例）などである。このうち本節では用例数の多い3品詞（形容詞、動詞、連体詞）¹¹⁾が前接する場合を例に、前接ア別にみた当該アの割合を【表9】に表す。各数値は、前接品詞に対するその語の当該ア全体の中での割合を表している。

形容詞の場合、前接アはほとんど—②である。そのため、形容詞の場合は、後接する当該アには①が生起しにくく、少ない。次に、動詞と連体詞の場合は前接アはほとんど①で

【表9】形容詞・動詞・連体詞の前接ア別に見た当該アの割合

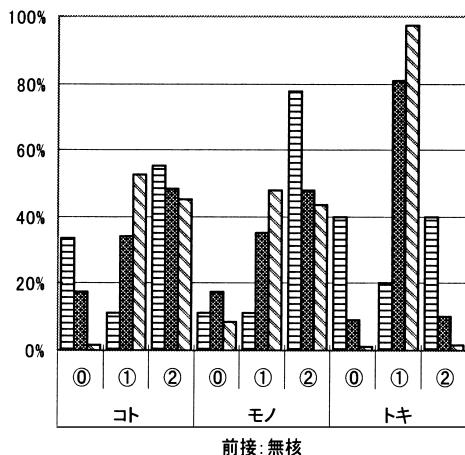
前接品詞とア	当該ア	コト				モノ				トキ			
		①	②	実数	①	②	実数	①	②	実数	①	②	実数
形容詞	①	2.8%	0.9%	4.7%	9	1.0%	1.0%	7.2%	9	7%	4%	7%	5
	—①	4%			4					7%			2
	—②	46.2%	0.9%	35.8%	88	42.3%	8.2%	36.1%	84	59%	4%	11%	20
	—③④	2%		3%	5	2%		2%	4				
動詞	①	15.2%	29.5%	41.6%	2062	14.2%	28.7%	39.0%	399	6.4%	57.1%	7.1%	99
	—①	0.3%		0.0%	7	0.8%			4	1%	1%		2
	—②	5.7%	0.8%	5.9%	296	8.2%	0.8%	7.0%	78	20.7%	2.1%	4.3%	38
	—③④	0.2%	0.1%	0.7%	25	0.2%	0.2%	0.8%	6	1%			1
連体詞	①	1.7%	48.7%	42.0%	110	7.3%	40.0%	36.4%	46	0.8%	94.4%	1.6%	122
	—①	2%			2								
	—②	1%			1					2.4%		0.8%	4
	—③④	3.4%	0.8%	0.8%	6	5.5%		10.9%	9				

ある。動詞の前接アは①が非常に多いため¹³⁾、当該アに①が生起する数が増える。トキの場合、前接アが①の場合、当該アは①が生起する割合は8割近い。連体詞の場合も同様、前接アはほとんど①である。したがって、当該アは①が非常に多い。特にトキの場合、①の生起は94.4%である。

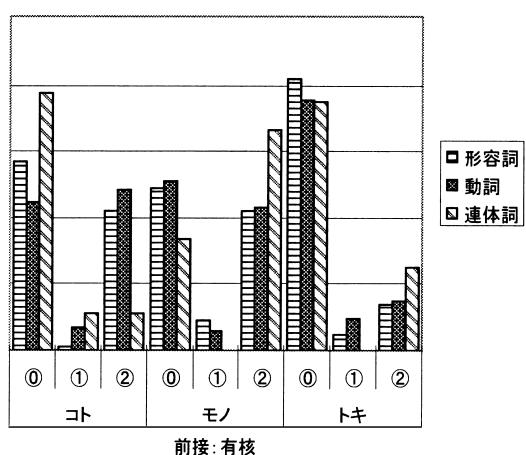
このように、品詞によって属するアクセントが異なることが、当該アの生起に関わっているといえる。

これら3品詞を、前接する語が有核の場合【図3】と無核の場合【図4】に分類し、棒グラフで表す。

まず、前接が無核の場合（【図3】）では、コト・モノの当該アは②が多い。一方、トキ



【図3】前接が無核の場合の当該ア



【図4】前接が有核の場合の当該ア

だけは、形容詞を除いて、前接が無核の場合でも、①が多い。前接が有核の場合（【図4】）は、コトとモノの当該アは①と②が多い。トキは、①の割合が非常に多いが、②はコトとモノより少ない。前接が有核の場合に①が多く生じる理由は、先に述べたとおり、アクセントの弱化である。また、前接が無核の場合より、特に形容詞と動詞に①の割合が少なく、モノの連体詞の場合は0%であった。

動詞や連体詞は無核多いため、これら無核の品詞が前接すると、結果的に当該ア①の割合は高くなる。特に、連体詞はほとんど無核のため、①が多い。

トキのアクセントに関する田代（1980）では、「名詞のアクセントの小則」の一つとして、連体詞や動詞が前接するトキのアクセントの例を、以下のように紹介している。（ここでのアクセント情報は、下がり目のあるすぐ前の一文字だけがゴシック体で表されている。）

◇形容語句に続く『とき』(1語中高化)^{注)}

〈この子が 学校へ あがるとき そのときは サクラの 咲くとき〉

(中略) 注) 2語が1語に熟したためのアクセントであるが、分離して元通りのアクセントでも可!

つまり少なくとも1980年の時点で、トキのアクセントが頭高型で生起する現象は存在していたことがわかる。そしてこの現象のことを、田代(1980)では「1語中高化」と称している。しかし、この情報は、アクセントが記載された辞典類には、採用されていない。田代(1980)には、前接する語のアクセント型に関しては特記されていないが、ここに挙げられている例である連体詞「この」「その」と動詞「あがる」「さく」の4語はいずれも、平板型であり、今回の分析でも無核が多かった品詞である。また、前接する品詞が動詞と連体詞の場合、どちらの方が「1語中高化」しやすいか、ということに関しては言及されていないが、品詞によって、所属するアクセント型の割合は異なるので、品詞ごとに「1語中高化」する割合も異なると言えよう。今回のCSJ検索においては、前接する品詞が連体詞の場合、特に当該アが頭高型になりやすいが、形容詞が前接する場合はそうではないということがわかった。

5.3 後接語と無声化環境

次に、コト・モノ・トキの3語のうち、トキの当該アが顕著に①の割合が高い(頭高型が生起しやすい)理由について、後接する語(以下、後接語)との関連から考察する。理由の一つには、トキは、最終モーラ「キ」に破裂子音・狭母音を持つので、母音が無声化しやすい環境(川上1977)にあるからである。典型的な母音無声化環境は「無声子音+狭母音+無声子音」であり、トキは、3語の中では、最も最終モーラが無声化しやすい環境にある。そして、無声化するモーラにアクセント核がある場合は発音しにくいため、核は前にずれ、トキという語に頭高型が生起しやすくなるのである。そこで、本稿では、母音の無声化が生じやすい無声子音が後接した場合には、そうではない場合よりも頭高型が生起しやすいかどうかを検討する。

【表10】トキの当該アと後接語

後接語 当該ア	カラ	カ	ト	ッテ	ニ	ハ	モ	ガ	デ
①	6	0	4	1	123	21	3	4	6
	46.2%		23.5%	33.3%	29.1%	18.4%	12.0%	20.0%	40.0%
②	7	1	12	1	264	84	14	12	6
	53.8%	100%	70.6%	33.3%	62.6%	73.7%	56.0%	60.0%	40.0%
合計	0	0	1	1	35	9	8	4	3
			5.9%	33.3%	8.3%	7.9%	32.0%	20.0%	20.0%
合計	13	1	17	3	422	114	25	20	15

後接語 当該ア	デス	ダッ	ヲ	その他	合計
①	3	1	1	2	175
	27.3%	16.7%	25.0%		26.3%
②	6	4		10	421
	54.5%	66.7%			63.3%
合計	2	1	3	2	69
	18.2%	16.7%	75.0%		10.4%
合計	11	6	4	14	665

トキの当該アと後接語の数値と割合を【表10】で表す。

【表10】の上左側の4語、カラ、カ、ト、ッテが後接する場合が、典型的な母音無声化環境である。

【表10】により、トキの後接語は大半が「ニ」と「ハ」であり、トキの「キ」に無声化が生じやすい後接語の用例数は多くないことがわかる。後接語がトの場合は、ほとんど①が生起しているが、後接語が「カラ」の場合は半数程度である。

次に、コト、モノ、トキそれぞれの当該アと、母音の無声化が生じやすい後接語、カ・カラ・トの数を【表11】で表す。また、対比のため、尾高型に後接しても高く続くといわれている「ノ」の結果も表す。

【表11】後接語の音環境

後接語		母音無声化環境			①環境
		力	カラ	ト	
コト	①	4	9	35	ノ
	①	3	5	14	16
	②	7	29	39	17
モノ	①	5	4	48	18
	①	5	2	9	26
	②	11	7	54	9
トキ	①	0	6	0	10
	①	1	7	12	23
	②	0	0	0	69
					5

【表11】から、母音の無声化しやすい後接語が来ても、典型的無声化環境であるトキと比べ、コト、モノは、当該ア①が生起する割合は少ないことがわかる。トキにトが後接する場合は、当該アは①が100%生起しているが、コト、モノの場合は少ない。後接語がカラの場合、トキの当該ア①は半数であるが、それでもコト、モノと比べると多い。次に、「ノ」が後接する場合は、3語とも当該アは①ばかりではなく①や②も高確率で生起していることがわかり、特にトキは①が71%（97例中69例）もある。

次に、3語に母音の無声化および撥音化がどの程度生起しているのかを【表12】で表す。コト・トキの無声化例は、それぞれ72例、53例であった。コトは最終モーラの「ト」よりも最初のモーラの「コ」に無声化が多く生じているが、トキはほとんどが最終モーラの「キ」の無声化である。また、モノの「ノ」が撥音になり「モン」と生起する例では、当該ア①の数は80例中46例であった。「ン」が特殊拍のためアクセントの核が来にくく、頭高型が生起しやすい環境だからである。

最後に、トキの「キ」の母音が無声化した場合の後接語を【表13】に表す。

【表12】無声化と撥音化

	コト	トキ	モノ	モン
前拍	35	1	1	
後拍	29	51	1	
両方	8	1	1	
合計	72	53	3	80

【表13】トキの「キ」母音無声化の場合の後接語

ト	カラ	ニ	ハ	モ	デ	その他	合計
14	12	13	5	3	2	3	52

【表12】によると、トキの「キ」の母音が無声化したのは、後接語が「ト」14例、「力

ラ」12例の場合であり、残り26例は有声音をもつ語であった。「キ」の無声化は、後接が無声破裂音・破擦音・摩擦音の場合だけではないことがわかる。キは、典型的無声化環境以外でも無声化が生じやすいといえる。

以上の結果から、トキの「キ」の母音は、コト、モノの最終モーラの母音より無声化しやすい環境にあることがわかる。このことが、トキの頭高型生起の要因の一つであると考えられよう。

5 . 4 . 語のもつ意味と統語環境

各語のアクセントに①が生じる割合が異なる理由の一つに、語のもつ意味と統語環境が挙げられる。形式名詞は「名詞の性質を持ちながら意味的に希薄で、修飾要素なしでは使えない」（益岡・田窪1992）つまり機能語の要素が強いといえるだろう。しかし、コト、モノ、トキは、内容語として使われることもある。中でも、トキは時間を表すマーカーとして、コト・モノよりも意味的に内容語的な要素が強いと考えられる。

また、トキの統語構造は文頭、あるいは意味の切れ目のある句頭に立つことが多く、一方、コトとモノは文末に来ることがトキよりも多いように思われる。そこで、前接する語（10短単位とする）の中に文末（句末）マーカーが含まれる数と、当該の語の直後に後接する要素（1短単位とする）に文末（句末）マーカーが含まれる数を、それぞれ調べた。その結果が【表14】、【表15】である。文末や句末を表示するマーカーは、本稿では「デス」「ダ」という断定辞とし、「デシ」「デショ」「ダッ」も含める。

【表14】前接語中に含まれる句末マーカーの数

	コト	モノ	トキ
デス	319	158	160
デシ	26	13	7
デショ	6	4	0
ダ	179	115	51
ダッ	133	64	65
合計	663	354	283
全体	3514	1442	665
割合	18.9%	24.5%	42.6%

【表15】当該語直後にくる句末マーカーの数

	コト	モノ	トキ
デス	190	197	11
デシ	16	12	3
デショ	2	0	0
ダ	31	27	1
ダッ	13	6	6
合計	252	242	21
全体	3514	1442	665
割合	7.2%	16.8%	3.2%

【表14】において、前接する10短単位の中に文末（句末）マーカーが含まれる例は、トキの場合に最も多く、42.6% であった。この結果から、トキは、文頭や句頭に近い位置に現れことが多いといえよう。また、【表15】から、直後に文末（句末）がくるのは、

モノが最も多く(16.8%)トキは少ない(3.2%)。このことからも、トキは、コト・モノとは異なる統語構造を形成することができる。

5.5.まとめ

二拍名詞コト・モノ・トキのアクセントは、前接アによって大きく左右されることが明らかになった。前接アが無核の場合には、当該アは①(頭高型)になる確率が非常に高く、前接アが有核の場合、当該アは②(尾高型)または③になるという傾向にある。また、前接品詞別にも観察したところ、一見品詞によってアクセントが異なるようにも思えるが、品詞によって前接アの型の構成比が異なるために当該アの生起の仕方にばらつきが生じているのであろう。当該アに頭高型が生起する環境は、前接アの核の有無が最も重要であるといえる。

また、特にトキは、句頭(文頭)におかれやすい。その上、最終モーラ「キ」が破裂音と狭母音という母音無声化環境にあり、アクセントが置かれにくいため、頭高型で生起する確率が高くなる。トキの持つ意味に内容語的要素が強いことと、母音無声化環境、統語環境などを鑑みて、コト・モノの頭高型生起は条件変異、トキの場合はさらに一步進んで、アクセントの変化の結果だと言うことができるのではないだろうか

前接アが無核の場合、当該アが頭高型に変化するという現象は、前接アが当該アと融合した結果であると考えられる。これは、「結合表示」の標識ではないだろうか。肥爪(2004)では「結合表示」の例として、促音挿入形や連濁形、複合動詞のアクセントについて言及している。その中で、平安時代のアクセント資料によると、緊密に結合したと思われる複合動詞でも、2つの語が独立してアクセントを持つことがあったという。この現象を「内部構造表示」と称している。これは、必ずしも「一単位化していなければ複合化していない」と解することはできない、という論拠である。しかし、現代の複合動詞のアクセントは中高型と平板型の二種類しかなく、いずれもアクセントのヤマは一つである。この変化から今回の結果を鑑みると、前接アと形式名詞のアクセントがより強い「結合表示」を表し「一単位化」した結果頭高が生じたという解釈ができるのではないか。そして、尾高型が無核化せずに頭高型で実現されるのは、元々が二語であったことを表すための「内部構造表示」だと考えられるのではないか。

5.2.で引用した田代(1980)でも、「ト'キ」が生じることの説明として、「1語中高化」つまり「2語が1語に熟したためのアクセント」という記述があったが、これも、「結合表示」と同義の現象を表しているように思える。つまり、前接アが無核の場合に頭高型が生じる理由は、前接語と当該語が「1語中高化」したからではないかということが

考えられる。

一方、前接アが有核の場合は、「アクセントは一語に一つ」であるため、つまり一度「1語中高化」したアクセントのヤマは一つになろうとし、後接するアクセント（本稿におけるコト・モノ・トキ）のヤマは低く抑えられ、頭高型が生じにくくなる、といえるのではないだろうか。

今回の検索で、頭高型ア生起が多く見られた理由は、対象とした語が形式名詞であり、自立性の低い名詞であったからといえるだろう。普通名詞は、【表2】でも述べたように、これほどの傾向は見られず、アクセントの現れ方は一定である。

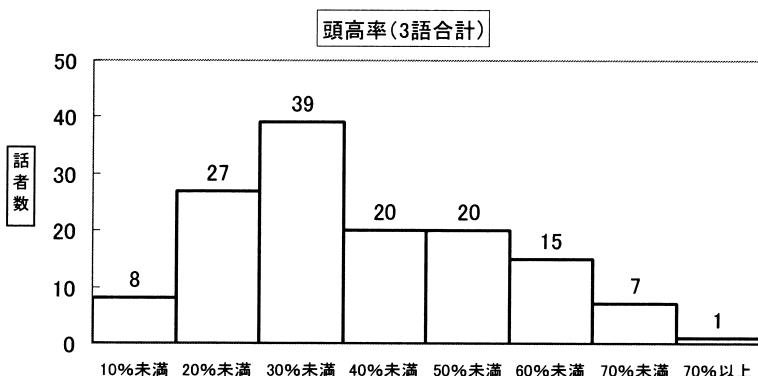
また、頭高型は聞こえやすく「耳立つ」アクセントである。杉藤（1983）では、近畿アクセントが頭高型に移行しやすいと述べているが、東京方言においても同様の変化が起こっているのではないかと推測できる。特に、句頭付近に立ちやすいトキが一番初めに頭高型に移行しつつあるのかもしれない。

6. 言語外的要因

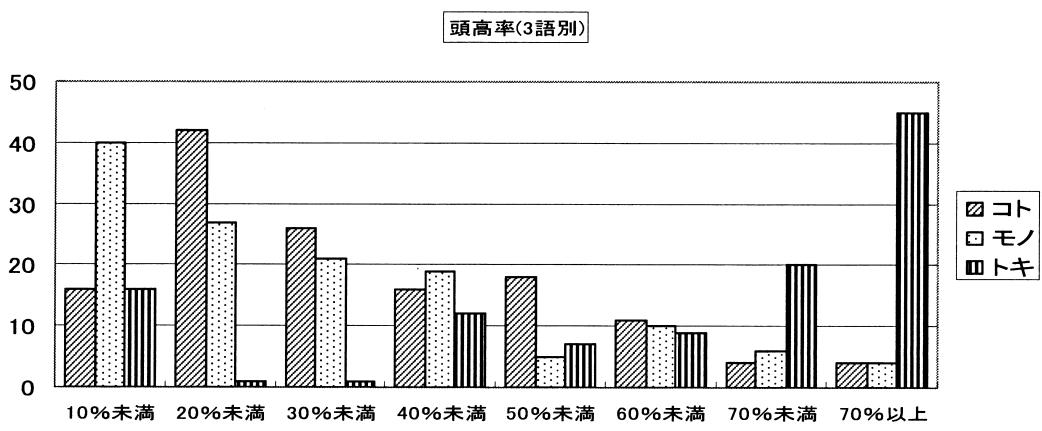
本節では、個人別、講演別の結果について、異なり講演者数137名、延べ177講演のデータそれについて、CSJの研究用付加情報を利用し言語外的要因を考察する。6.1.では異なり講演者数137名の各個人がどの程度頭高型を生起させているのかを調べる。6.2.以降では延べ講演数177のデータを用いて頭高型が生起する要因を考察する。6.2.では講演の種類別に、頭高型を生起させる割合に差があるかどうかを見る。6.3.では、CSJの研究用付加情報として、話者自身が記入したアンケート情報である講演者属性データ（籠宮2004）を用い、講演の得手不得手と講演経験数を観察する。6.4.及び6.5.では印象評定データを用いる。このデータは、聴き手が、話者が行う講演に対してどのような印象を受けたか、という情報を記録したものである。したがって、話者の意識とは一致しない場合もある。

6.1. 個人差

アクセントに①（頭高型）が付与されている割合を、「頭高型アクセント生起率」とする（以下、頭高率と表記する）。モノ・コト・トキ全てを合計した平均頭高率は31.1%であるが、137名の個人別に【図5】に各話者の3語全体の頭高率の分布を示す。また、3語それぞれの頭高率を【図6】に示す。



【図5】頭高率(3語合計)の分布

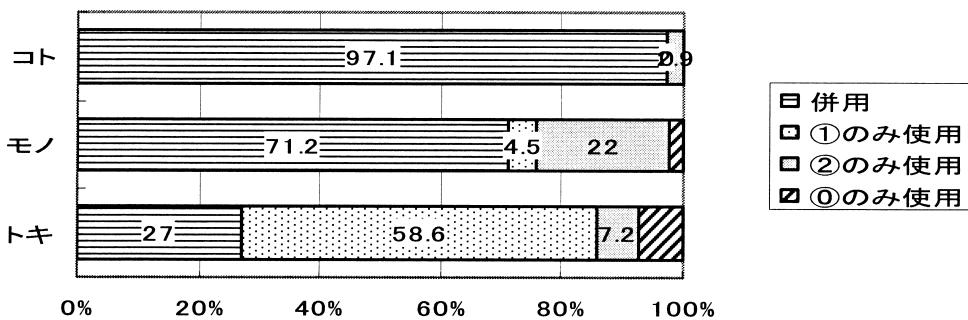


【図5】から、頻繁に頭高型を使用する話者と、ほとんど使用しない話者がいるが、平均して20%から40%程度使用する話者が最も多いことがわかる。次に、語別にみた【図6】では、モノは頭高率が低く、頭高率が10%未満の話者が多い。また、コト・モノでは頭高率70%以上の話者は少ないが、トキでは70%以上の話者が45名もいることがわかる。3語の平均頭高率はそれぞれ、コト27.8%、モノ23.0%、トキ59.6%であるが、トキには頭高率100%の話者が25名いる。一方、頭高率0%の話者は、コト4名(137名中)、モノ32名(132名中)、トキ16名(111名中)である。つまり、トキは全体に頭高率が高いが、頭高型を使用する話者と使用しない話者が混在している。コトとモノは共に頭高率が低い。

次に、各語の使用状況を、【表16】および【図7】に表す。

【表16】当該ア①・②の使用状況

使用状況	コト		モノ		トキ	
	全137名		全131名		全111名	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
①と②併用	133	97.1%	94	71.2%	30	27.0%
①のみ使用	0	0.0%	6	4.5%	65	58.6%
②のみ使用	4	2.9%	29	22.0%	8	7.2%
①のみ使用	0	0.0%	3	2.3%	8	7.2%
①を1回以上使用	133	97.1%	100	75.8%	95	85.6%
②を1回以上使用	137	100.0%	123	93.2%	38	34.2%



【図7】当該ア①・②の使用割合

コトの場合、137名全員が②を使用している。コトで①のみを使用するという話者はおらず、97.1%の話者が①と②を併用している。モノの場合も、併用者は71.2%と多いが、①のみ使用している話者も21.8%いる。トキは、①のみ使用する話者が58.6%で、②を使用する話者は34.2%しかいない。①(頭高型)を使用するかどうかという観点からは、ほとんどの話者がコトの頭高型を用いているが、モノの頭高型は、まったく使用しない話者もいることが明らかになった。コトは併用者が多く、トキは①が多く、モノはその中間的な様相であるが、②のみを使用する人が最も多いということがわかる。

6 . 2 . 講演種別

CSJで講演が二種類収録された理由は、スタイル差を社会言語学的な研究に利用するためである(前川2004)。そこで、コアの全177講演のうち、学会講演(70講演)と模擬講演(107講演)に分類して、頭高率を出した(【表17】)。

【表17】講演種別にみた頭高率（3語合計）

講演種別	講演数	頭高の数	全用例数	頭高率
学会講演	70	720	2878	25.0%
模擬講演	107	1027	2743	37.4%

【表17】から、学会講演よりも、スタイルが低いとされる模擬講演の方が、頭高率が高いことがわかる。分節音レベルでは模擬講演の方が非標準的な発音が出やすいという結果が報告されている（小磯2004、岡田2005など）が、本稿で扱った超分節音レベルにおいても同様の結果が得られた。スタイルの低い場面の方が、リラックスし、発話に対する注意力が弱まることで、頭高型が生起するのであろう。一種の「発音の怠け」と考えることもできよう。

6 . 3 . 講演の得手・不得手および講演経験別

講演の得手不得手や、講演経験の多寡についての結果を【表18】【表19】に表す。ここでのデータは、講演者自身が記入した、自己申告によるアンケート情報である。

【表18】講演の得手・不得手別にみた頭高率

得手・不得手	人 数	頭高率
不明	6	38.6%
不得手	39	34.4%
やや不得手	96	32.3%
やや得意	31	24.5%
得意	5	27.3%

【表19】講演経験別にみた頭高率

講演経験	人 数	頭高率
不明	7	37.8%
はじめてである	74	34.2%
5回以下である	48	31.0%
10回以下である	17	32.4%
20回以下である	9	23.2%
21回以上ある	22	25.5%

まず【表18】から、講演が得意な話者の方が頭高率が低いことがわかる。講演が得意な話者は、自分の発音に注意が向けられる程の余裕がある、ということであろうか。次に、【表19】をみると、講演経験数が多い話者の方が頭高率が低く、経験回数が10回以上と10回以下で分けられそうである。講演経験数が10回以下の話者は、まだ講演に不慣れであるため、アクセントなど発音レベルにまで意識が回らないが、講演経験数が10回以上ともなると熟練し、丁寧で規範的な発話の能力が得られるのではないか。以上の結果から、講演に慣れた話者は、発表技術が熟達し、自らの発音の正確さにまで注意を行き届かせられるようになる、と言えるのではないだろうか。

6.4. 講演の自発性

6.4. 及び6.5. で扱うデータは、聴取者が記入する印象評定データである。ここでは、講演の自発性の度合い別に観察する。自発性というのは、例えば、原稿を読み上げているような発話は自発性が低いとみなされ、原稿を見ないで自分の言葉で話しているような発話は自発性が高いとみなされる。【表18】では、「1」が最も自発性が低く、「5」が最も自発性が高い（籠宮2004）。

【表18】によると、講演の自発性が低い場合に頭高率が低くなっている。自発性が低いということは、原稿に頼っているため読み上げ口調のような独特の言い回しとなるが、緊張感を伴うと自らの発話に注意が行き届くこととなり、規範的な発話に近づくため、頭高型が生起しにくくなる、ということではないだろうか。

【表20】講演の自発性と頭高率

講演の自発性	人 数	頭高率
1	10	19.9%
2	15	23.0%
3	24	25.9%
4	57	32.2%
5	71	35.7%

6.5. 緊張・リラックス別

次に、緊張しているように聞こえたかどうかを【表21】に、リラックスして聞こえたかどうかを【表22】に表す。

【表21】緊張の有無と頭高率

緊張	人 数	頭高率
1（した）	41	29.0%
2（していない）	136	31.7%

【表22】リラックスの有無と頭高率

リラックス	人 数	頭高率
1（した）	58	36.8%
2（していない）	119	28.6%

緊張しているように聞こえるかどうかにはほとんど差が見られなかった（【表21】）が、【表22】を見ると、リラックスしていないように聞こえる講演の方が、頭高率は低い。この結果は、6.2. の講演種別の結果及び6.4. の講演の自発性の結果とも一致するようである。リラックスして話すということは、発話意図として、スタイルが低いものであると言えよう。そのため、はっきりと発音してアクセント型を正確に実現しようという意識が薄らぎ、頭高型が生じる、と考えることができるのでないだろうか。

6.6. 発話速度

発話速度と頭高率には関連が見られなかった。

6.7. 講演者属性データ別（性別・生年代・学歴）

最後に、講演者属性データと頭高率との関連について述べる。性別、学歴別、生年代別、出生地別、両親出生地別に頭高率をみたが、これらの属性と頭高率とは直接には関連がなさそうであった。

6.8. 考察

頭高型をどの程度使用するのかということに関しては個人差が大きく、全く頭高型を用いない話者もいれば、ほぼ頭高型だけを用いている話者もいることがわかった。

頭高率が低いのは、模擬講演よりも学会講演であり、自発性が低く、原稿を読み上げるような講演であり、また、リラックスの度合いが低い講演の場合であった。また、講演が得意であり、講演経験が豊富であり、場数を踏んでいるという話者も、頭高率が低いということも明らかになった。このように、講演慣れしている話者は、自分の発音にまで注意を向けられる余裕を持っているということであろう。

頭高率に関する言語外的要因は、発話する場面のスタイルが高いか低いか、ということと、講演に熟達しているかどうか、という要因が大きいことがわかった。

7. おわりに

以上、CSJ の自発発話データを用いて、二拍形式名詞のアクセントの型の出現を、言語内的要因、言語外的要因の両面から分析した。モノ、コト、トキ3語とも、従来の尾高型ではなく、アクセントが記載された辞典類にはない頭高型で発話される割合が非常に多く、特に、トキのアクセントは、尾高型よりも頭高型の方が多い。

言語内的要因としては、前接アによって当該アが決まるといえる。そして、頭高型が生起する要因は、前接アと当該アが融合して「1語中高化」した「結合表示」だという解釈を提示した。また、特にトキは、句頭（文頭）に立ちやすく、意味的にも内容語的要素が強い。そして、最終モーラ「キ」が破裂音と狭母音であり、この環境において母音の無声化が生起しやすいために、アクセントが置かれにくくなり、頭高型が生起しやすいのであると言えよう。

今回の結果を鑑み、コト・モノに頭高型が生起するのは、前接アが平板型の場合に限定

される条件変異であるが、トキの場合はアクセントが頭高型に移行しつつあると考えられるのではないか。

言語外的要因に関しては、頭高率は個人差が大きい。しかし、性差、年齢差、学歴差などには関与が確認されなかった。講演種別には、模擬講演の方が学会講演よりも頭高率が高い。また、聴取者が作成した印象評定データから、自発的に話している講演の場合や、発話者が緊張せずリラックスしている場合、つまり、スタイルの低いカジュアルな講演の方に頭高型が生じやすいということが明らかになった。また、講演経験回数が10回以上ある場合は、頭高率が低い。このことから、講演経験が多くなると自分の発話をコントロールしやすく、規範のアクセントを生起させられるようになると考えられる。

これからアクセント研究法の一つとして、CSJに格納されている膨大な自発発話データを検索することで、従来の規範的なアクセント以外に多様なアクセントが実現されるという可能性を提示することができる。そして、これからの音声教育に関しても多大な示唆を与えてくれることだろう。アクセント型は、場合によっては、必ずしもアクセント辞典類に掲載されているとおりに実現させなくてもよい、ということが言えるのではないだろうか。

形式名詞は尾高型を明瞭に発話しない場合が多く、特にトキには頭高型が多く生起する、という今回の結果は、読み上げ調査だけではわからない点であろう。自発発話を詳しく観察していくば、従来規範とされてきたアクセント型を、実際には必ずしも明瞭に実現させなくてもよい場合があるということが明確になる。また、CSJのような大規模自発発話コーパスを効果的に利用することで、標準語アクセントの規範とする事項について再検討が可能になるのではなかろうか。土岐（2005）は以下のように述べている。

日本語の自然な発話資料を「日本語話し言葉コーパス（CSJ）」などによって大量に調べてゆくと、ある音環境にあっては、日本語話者の例であっても相当の確率で「不全」を引き起こす場合が見られる（例えば、母音の長さなど）。これまで、学習者だから生じるとされてきた現象が、実は、日本語話者にも容易に起こることだと分かれば、それらは一部「問題項目」の上位から除外されることになり、学習者に無駄な努力を強いる必要がなくなることにも繋がる。まだまだ解明の余地がある切り口である。

CSJを用いた検索は非常に便利である。これらの情報を有効に用いつつ、どういった要因が最もアクセントに影響を及ぼすのか、さらに詳細に検討したい。また、名詞の種類

や品詞によっても音声の現れ方は異なると予想されるので、形式名詞以外の名詞や別の品詞について、また、それぞれの語のもつ意味やなじみ度との関連なども、検討すべきであろう。ただし、CSJでは話者自身の属性情報は限られており、話者の発話意図なども不明である。また、CSJには少ない事例、あるいは無い事例もある。そのため、今回の分析結果をもとにして、独自に資料を収集し、さらに広く分析、考察を行う必要があると考えている。

謝辞

本稿を執筆するに当たって、貴重なご意見をくださいました皆様に御礼申し上げます。また、CSJの制作に関わられた皆様に感謝します。

付記

本研究の一部は、2005年度第1回博報「ことばと文化・教育」助成（「標準語」の多様性／代表：岡田祥平）を受けています。

【注】

- 1) 『日本語発音アクセント辞典新版』(1998)、『新明解日本語アクセント辞典第二版』(2001)、『全国アクセント辞典』(1960)など。
- 2) 『日本語話し言葉コーパス』については前川(2004)、国立国語研究所(2006)などが詳しい。
- 3) Corpus of Spontaneous Japanese
- 4) CSJの韻律ラベリングの概要については、五十嵐・菊池・前川(2006)に詳しい。
- 5) CSJのXML文書については、菊池・塚原(2006)に詳しい。
- 6) 二拍名詞に③のアクセントが出現する理由は、特殊拍が挿入され、たとえばコトが「コート」のように発話される場合があるからである。
- 7) CSJの転記テキストについては、小磯・西川・馬淵(2006)に詳しい。
- 8) 二拍名詞を抽出する際、複合名詞の一部などになる場合は予め除外している。
- 9) ここでいう形式名詞は、「名詞の性質を持ちながら意味的に希薄で、修飾要素なしでは使えない名詞（益岡・田窪1992）」である。
- 10) CSJの品詞情報は、小椋(2006)に詳しい。
- 11) 助詞を分析対象から除外したのは、前接助詞の90%が「ノ」であるからである。助動詞を削除したのは、品詞は形態素によって区切られるために、CSJのラベリングでは、形容動詞(CSJでは形状詞)の活用形、例えば、「行った」の「タ」や、「きれいな」の「ナ」のみのアクセント情報となるか

らである。なお、本稿で扱っている動詞とは、終止形のみを表していることになる。

- 12) 前接する動詞の大半は、「という(ていう)」、「(どう)いう」などである。

【参考文献】

- 相澤正夫(1984)「アクセント変化の要因」『日本語学』 Vol3. 11月号 .
- 相澤正夫(1996)「語の長さとアクセント変化—『東京語アクセント資料』の分析—」『国立国語研究報告集17』 国立国語研究所 .
- 相澤正夫(2003)「音声現象の多様性」『朝倉日本語講座3 音声・音韻』 朝倉書店 .
- 秋永一枝(1957)「アクセント推移の要因について」『国語学』 31号 .
- 秋永一枝(1999)『東京弁アクセントの変容』 笠間書院 .
- 秋永一枝編(2001)『新明解日本語アクセント辞典 第二版』 三省堂 .
- 五十嵐陽介・菊池英明・前川喜久雄(2006)「第7章 韻律情報」『国立国語研究所報告124 日本語話し言葉コーパスの構築法』 国立国語研究所 .
- 出野晃子(2006)「大阪方言話者の「標準語」発話と個人差—『日本語話し言葉コーパス』を資料とした二拍名詞の分析—」『姫路獨協大学大学院日本語教育論集』 第15号 .
- 伊藤雅光(2002)『計量言語学入門』 大修館書店 .
- 稻垣滋子・堀口純子(1979)「東京語におけるアクセントのゆれ」 F・C・パン編 『ことばの諸相』 文化評論出版 .
- 稻垣滋子(1984)「アクセントのゆれに関わる要素について」 平山輝男博士古稀記念会編『現代方言学の課題 第2巻 記述的研究篇』 明治書院 .
- NHK放送文化研究所編(1998)『日本語発音アクセント辞典 新版』 日本放送出版協会 .
- 岡田祥平(2005)「文末位置の「デス」・「マス」の「ス」の母音の無声化—『日本語話し言葉コーパス』を用いた分析—」『2005(平成17)年度日本音声学会第19回全国大会予稿集』 .
- 小椋秀樹(2006)「第3章 形態論情報」『国立国語研究所報告124 日本語話し言葉コーパスの構築法』 国立国語研究所 .
- 籠宮隆之(2004)「記録票データ・対話記録票データ・講演者属性データ 対話参加講演者の講演一覧の概説」『日本語話し言葉コーパス』 同梱電子資料 (http://www2.kokken.go.jp/csj/public/manuals/data_attribute.pdf Version 1.1).
- 籠宮隆之・山住賢司・槇洋一(2004)「印象評定データの概要」『日本語話し言葉コーパス』 同梱電子資料 (<http://www2.kokken.go.jp/csj/public/manuals/impression.pdf>)

Version 1.2).

川上泰(1977)『日本語音声概説』おうふう.

菊池英明・塙原涉(2006)「第8章 XML文書」『国立国語研究所報告124 日本語話し言葉コーパスの構築法』国立国語研究所.

小磯花絵・西川賢哉・間淵洋子(2006)「第2章 転記テキスト」『国立国語研究所報告124 日本語話し言葉コーパスの構築法』国立国語研究所.

小磯花絵・間淵洋子・前川喜久雄(2004)「助詞の撥音化現象：『日本語話し言葉コーパス』を用いた音声転訛現象の分析」『言語・音声理解と対話処理研究会(第43回)人工知能学会研究会資料』.

郡史郎(1997)「日本語のイントネーション—型と機能—」杉藤美代子監修『日本語音声2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂.

郡史郎(2003)「イントネーション」上野善道編『朝倉日本語講座3 音声・音韻』朝倉書店.

国立国語研究所(2006)『国立国語研究所報告124 日本語話し言葉コーパスの構築法』国立国語研究所.

佐藤亮一(1990)「現代東京語のアクセント一年齢差および辞典との差を中心に—」『国語論究第2集 文字・音韻の研究』明治書院.

杉藤美代子(1983)「アクセントのゆれ」『日本語学』8月号.

田代晃二(1980)『美しい日本語の発音 アクセントと表現』第1版第5刷[1970]創元社.

土岐哲(2005)「音声研究と日本語教育」『開かれた日本語教育の扉』スリーエーネットワーク.

肥爪周二(2004)「結合表示と内部構造表示」『音声研究』第8巻第2号.

平山輝男編(1960)『全国アクセント辞典』東京堂出版.

前川喜久雄(2004)「『日本語話し言葉コーパス』の概要」『日本語科学』15.

前川喜久雄(2006)「第9章 CSJの検索」『国立国語研究所報告124 日本語話し言葉コーパスの構築法』国立国語研究所.

前川喜久雄・五十嵐陽介(2006)「2 モーラ有格助詞の韻律上の独立性—『日本語話し言葉コーパス』の分析—」『音声研究』第10巻第2号.

益岡隆志・田窪行則共著(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版.

馬瀬良雄・佐藤亮一編(1985)『東京語アクセント資料』上巻・下巻 文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」資料集.

馬瀬良雄・佐藤亮一編(1989)「東京語アクセントの多様性」杉藤美代子編『講座日本語と日本語教育2 日本語の音声・音韻(上)』明治書院。

(博士後期課程学生)

(2006年8月25日受付)

(2006年10月10日修正版受付)

(2006年11月7日再修正版受付)

(2006年11月18日掲載決定)